問題をいかに深めるか

── 多文化主義とアイデンティティの問題を中心に ──

西　川　長　夫

1．はじめに

皆さん今日は暑いさなか，多数お集まりいただき，ありがとうございます。いま，高橋さんのほうから説明がありましたように，今日のシンポジウムは「『二十一世紀的世界と多言語・多文化主義―周辺からの遠近法―』再論」となっています。ビラには再論のところに感嘆符がついていたと思います。「再論」とはもちろん昨年の11月2日・3日・4日に行われた，この研究所の10周年記念シンポジウムを踏まえて，そこで提起されたさまざまな問題をさらに深めていこうという趣旨からです。あれから7，8ヵ月たっているわけですが，ここに立つとあの3日間，毎日午前10時から午後7時くらいまで続けられた，シンポジウムのさまざまな発言や，とりわけ会場の熱気が，昨日のことのように思い出されます。

国際言語文化研究所の歴史では初めての，そしておそらく立命館の歴史のなかでも特筆すべき，充実したシンポジウムであったと思います。この会場には今日は初めて来られた方も，大勢いらっしゃると思いますが，その3日間の全記録が今回，装いも新たにされた『立命館言語文化研究』第11巻1号に収められているので，どうか御覧下さい。

そういうわけで，昨年の10周年記念シンポジウムは私たちの予想をはるかに越える大成功であったと思いますが，何せ初めての国際シンポジウムですし，会の運営その他，反省すべき点もたくさんありました。そして特にパネラーの方には自分の意見を充分に展開していただくだけの時間が足りなかったし，フロアーの皆さんのご意見も充分に聞けなかった。対話やディスカッションが成立する以前に終わってしまって，鬱屈した不満を抱いて帰られた方もあったのではないかと思います。

そういう不満に応えたいということが，今日の「再論」の一つの理由です。もう一つは，シンポジウムというものはとかく喋りっぱなし，聞きっぱなしに終わってしまって，その瞬間はおもしろいけれども，それっきりで忘れ去られてしまうという，何か空しい感じが後に残ることが多いのですが，この素晴らしいシンポジウムをそれだけで終わらせたくないという気持ちがありました。本当は今日，再論をして，又，再々論ができたらいいなあと思いますが，そういうわけにもいかないので，参加者の方に執筆をお願いして，再々論は本の形で，1冊の本にまとめて，今年度中に出版したいと思っています。

今回のシンポジウムは前回，外国からお招きした3人の方々，ミリアム・シルバーバーグさん，トリン・T・ミンハさん，ギヤン・プラカーシュさんには予算の制約もあって，残念ですが今回は，お招きすることができませんでした。ただ，その他の国内の方々にはお忙しい中をかけつけていただきまして，大変ありがたく，感謝の気持ちでいっぱいです。

2．鄭暎恵さんの批判に応えて

それで，前回と同じタイトルで「再論」をお願いする以上，私は主催者の一人として，このテーマに関する自分の立場と考えを，改めてここで述べる義務があるのではないかと思います。といっても，時間が限られているので，少し変わったやり方ですが，以下の私の話は，前回パネラーとして出席していただいた鄭暎恵（チョン・ヨンヘ）さんのコメントに答えるという形でやらせていただきたいと思います。鄭さんの報告は，『立命館言語文化研究』第11巻1号の89ページ以下にあります。私はゲラ刷りのほうを見て，これを書いているので，ひょっとし

たら原文に訂正があったりするかもしれませんが，その時は指摘して下さい。鄭さんには大変いいコメントをしていただきました。それは，主として私の前回の報告『20世紀をいかに越えるか』に対する批判なのですが，このシンポジウムのテーマ，あるいはシンポジウムのやり方そのものに対する批判も含んでいるので，まずそれに答えることから再論を始めたいと思います。

鄭暎恵さんには今日来ていただいて，ぜひこの場でディスカッションをしたかったのですが，残念ながらいろいろ事情がおありのようで，出席していただいておりません。これは私の勝手な思い込みなのですが，たぶん鄭さんがこの場にいないこと，つまり鄭さんの不在自体が，このシンポジウムに対する一つの批判になっているのではないかなと思います。というのは，このようなテーマのシンポジウムに招いて，在日朝鮮人として何かを語れと求めること自体が一種の暴力的な行為ではないかということです。直接そのようには言われていませんが，そうではないかと思います。鄭さんのペーパーから引用させていただきます。

≪他者化されるものは他者に規定されるため，その規定をされたものを脱ぎ捨てて，そこから自由になるためにこそ語り続けなければならない。しかし，語れば語るほど他者化される罠に嵌まる。ひるがえって語らせようとする側は，果して自己規定をどれだけできているのか，自己規定をしている／しようとする自覚はあるのか≫(p.90)。

これはつまり語らせようとする側，すなわち私たち主催者とこのシンポジウムに対する厳しい批判というよりは，むしろ憤りの声だろうと思います。引用を続けます。少し離れたところで同じ頁の下から二行目です。≪二つのネイションビルディングの狭間で，多重性を与えられながらも，かつ同時に多重性を捨てろというサインがおくられてくる。多重性を捨てろといわれた上に，「20世紀世界と多言語主義，多文化主義で国民国家を変えよう」という声が大きくなりますと，今度は多文化主義を構築するために何かを語れ，何かを代表せよという形で，差異の顕在化をまた求められ，それが消費されたり，そのために権力者になったり，忙しくなります。その上でき上がった多文化主義は，しかも決して私自身のためにならない可能性が高いということです。≫

たしかにそうだと思いますし，鄭さんのおかれている状況を考えてみると，それは切実な訴えだと思います。多文化主義を論じる場合に留意しなければならない指摘ですが，引用をここまで続けてくると，鄭さんがある一つの誤解を前提にして，ひょっとしてそれは誤解ではないかもしれませんが，この議論を組み立てているということもわかってきます。つまり私は「20世紀世界と多言語主義，多文化主義で国民国家を変えよう」と，これはカギ括弧で書かれているけれども，そういう言い方は一回もしていないと思いますし，それがこのシンポジウムの趣旨でもないと思います。

同じような誤解がその1ページほど前の「趣旨」を引用した文章にもあると思います。次のような文章です。≪多文化主義に関して，西川さんの問題提起では「一元的な国民国家の原理とは対照的な多言語主義，多文化主義の視点こそ重要だ」とあります。国民国家の原理は，多言語主義，多文化主義と比べると一元的かもしれませんが，必ずしも一元的とはいえない部分があります。さらに多言語主義，多文化主義もかなり多様性があります。全く反対の方向を向いたものを一つの言葉，多言語主義，多文化主義ということで表すことがあるために，さまざまな混乱が起きているのではないかと思います。≫

そのカギ括弧に入れてある文章はプログラムに記された「趣旨」からの引用で，厳密にいうと，僕の文章ではないのですが，それに続くコメント，これは今読み上げましたけれども，私はまったく同感ですし，同じ認識を持っています。そのことはすでにいろいろ書いたり，しゃべったりしているわけですが，この研究所が出している「国民国家と多文化社会」シリーズのＥＵ，カナダとオーストラリアさらにはアジアを扱った3冊の本の中にもそのように書かれていると思います。

このシンポジウムでは，そういった多文化主義・多言語主義の複雑な部分をもう少し立ち入って論じてほしいというように思っていました。ただその「趣旨」の文章ですが，「一元的な国民国家の原理とは対照的な多言語主義・多文化主義の視点こそ重要

だ」という文章は，誤解は招きやすいけれども，私は基本的にはそれは正しいと思っています。つまり国民国家の原理は基本的に一元的なものを目指しているというようにいえると思います。それが維持できなくなって多言語・多文化主義が出てくるのだと私は考えています。これもいろいろ異論があれば，議論していただきたいのですが。

3．多文化主義再考

ここで多文化主義・多言語主義に関する私の考えを簡単にまとめて述べさせていただきます。時間が足らなくて，項目を並べるような形になってしまいますが，私が考えている問題のありかのいくつかを指摘しているのだと考えて下さい。

まず用語の問題ですが，マルチカルチェラリズムという言葉，これはわりあい新しい言葉であって，辞書を引いてみると，英語では1965年，フランス語では1971年からということになっているようです。この英語とフランス語のずれはヨーロッパにおける多文化主義と英国圏における多文化主義の違いを示すものとして興味深い。1971年というのは，皆さんご存知のように，カナダとオーストラリアで国是として多文化主義が採用される日付を示しています。その用語が使われはじめる日付は，わりあい重要ではないかと思います。そのあたりから世界が大きく変わってくる。そういう時点に多文化主義の問題が出てくるのだろうと思います。

鄭暎恵さんはこの中で，多文化主義はネイションビルディングと共犯関係にある場合もあるのだということを強調されていて，金城武の『不夜城』の例なんかを出しておられています。多文化主義を考察する上で，第一の特色として，政策としての多文化主義は国民統合の一形態であると考えてよいのではないでしょうか。このことはまちがいないと思います。そういう前提から出発したいと思います。それは例えばカナダで，最初に多文化主義が表明される時のトルドー首相の議会での演説，これは読み方によっては大変感動的なのですが，そこにはこれは国民統合のためのものであると同時に，国民の個々人のアイデンティティの安定のためだという明確な言葉があります。オーストラリアの場合も同じことで，多文化主義が政策として出てくる前に，いろいろマイノリティのエスニック集団であるとか，先住民族の人達の戦いというのがあるのですが，政策としてそれが取り入れられた時には，明らかに国民統合の形をとっている。ヨーロッパ統合，つまりEUにおける多文化主義に関しても詳しいことは省略しますが，同じことが言えると思います。

ただそれではなぜ多文化主義という形を取るかというと，それはやはり古い国民国家の一元的な原理が通用しなくなった結果として，いわば国民国家の生き残り策として出てきた。あるいはヨーロッパからの移民がそこにとどまって居続けることの，正当性の原理を求めなければならないということがあって，出てきているわけです。ですからそれは国民国家が揺らぎはじめていることの一つの兆候であるし，又，逆にそのことが結果的に既成の国民国家を突き崩す動きにもなってくる，ということがあると思います。

例えばカナダの多文化主義・多言語主義というのは，皆さんご存じのように，ケベックのフランス系の人達の主張から始まって，二言語・二文化主義から出発する。ところがフランス系だけの権利を認めるのはおかしいのではないかという反撥が最初はウクライナ系とか，ドイツ系とか，アングロサクソン系ではない，メジャーでないヨーロッパ系の人達から出てきて，二言語・二文化主義が二言語・多文化主義になる。その動きがやがてアジア系の人たちの平等な権利を認める，さらには先住民の権利回復ということにつながってくる。

一度，多文化主義という言葉が発せられると，それが次第にさまざまなグループを引き込んで広がってきている一つの例が，カナダだと思います。オーストラリアの場合は，白豪主義というはっきりとした一元的な支配が維持できなくなってくる。そこでアジア系の移民たちに権利を認めて，むしろ進んで「アジア化」ということを表明することになる。

それで私は『多文化主義・多言語主義の現在』というオーストラリアとカナダを主として扱った本の中で，多言語主義・多文化主義は21世紀の人権宣言ではないだろうか，というような言い方をしまし

た。21世紀の人権宣言というのは，人権宣言を信じてらっしゃる方には，それでは多文化主義というのは，そんなにいいものなのかということになるかと思います。そうではなくて，人権宣言それ自体は非常に欺瞞に満ちたものであって，これは人権宣言が出されるとすぐに，オランプ・ド・グージュという女性が，これは男の権利宣言であって，女の権利は含まれていないことを見破って「女性と女性市民の権利宣言」という文章を書きました。それがフェミニズム運動の起点になっていると言ってもよいと思います。

同じように，例えばハイチ革命。フランス革命があって，その影響下でハイチ革命が行われる。つまりハイチの奴隷解放が行われ，世界で始めての黒人共和国がそこで成立する。そのよりどころとなったのは人権宣言です。しかし人権宣言が果して植民地解放の意味を持っているかというと，当時の議会での討論とかを分析していきますと，必ずしもそうではない。むしろ人権宣言を植民地解放に直接結び付けるような考え方をしている人はきわめて例外的で一人か二人しかいない。ずっと時代が下がって，19世紀後半の第三共和政に，植民地支配が改めて問題になる時，人権宣言がどう機能してくるか。フランスでは人権宣言はむしろ植民地支配を認める論拠として使われるようになる。「人権」を口実に支配や侵略が行われるという事態は現在にまで続います。しかしオランプ・ド・グージュの女権宣言も人権宣言がなければ出されなかったし，ハイチ革命も人権宣言がなければ，そのような形で始まらなかっただろう。歴史というのはそういうように進展していくものではないかと思います。

多文化主義を原理的に問い詰めてゆけばどういう矛盾や破綻が現れてくるか，あるいはどういう可能性がひらけるか，これが私の多文化主義に対する関心の持ち方であり，またこのシンポジウムに期待していることの一つです。この方向では新しい政治形態やアイデンティティ概念が問題になると思います。私が多文化主義に関心を抱くもう一つの理由は，歴史的に見てそれが時代転換の一つの兆候ということです。500年来の世界システムとか，あるいは200年来，はっきりした形を取ってきた国家間のシステムというようなものが，いま大きく転換しようとしている。そういう崩壊過程の中に多文化主義が現れてくるということでもありますし，その転換の中で，グローバリーゼーションと新たな原理主義といいますか，ナショナリズムの葛藤も現れてくるのだと思います。

4．多文化主義をアジアから問う

最近の『世界』に姜尚中さんが吉見俊哉さんと書かれた，「混成化社会への挑戦」というのが2回すでに出ていますが，「混成化社会への挑戦」という文章の副題は，「グローバル化の中の公共空間を求めて」ということになっていますが，そういう混成化社会への過程が多文化主義を時代転換の兆候として見ることによって，かなり見えてくるのではないでしょうか。

もう一つ，多文化主義が先住民の問題を，これはやむをえずという形ですが，だんだんと正面に出してこざるをえなかったことに注目したいと思います。それが何を意味するかということですが，今までのヨーロッパ的な主体といいますか，そういうものが維持出来なくなってきた。あるいはそういうものの歴史的な転換が始まっている。つまり500年来のヨーロッパ中心的な歴史がそこで書き換えられる。そして今まではカナダにしろ，オーストラリアにしろ，その歴史はヨーロッパ人がそこに移住してきた時から始まっていました。ところが今では，先住民の歴史から書きはじめる。それは必ずしも先住民の解放を意味するのではなくて，そういう先住民の歴史を含めて，歴史の書き換えをよぎなくされている。これは先住民の側から見れば，どういう意味をもつかということです。多文化主義は先住民にとって解放というよりは先住民の文化の横領ということになるでしょう。

以前オーストラリアの問題をやっている時に，オーストラリアの先住民のロバート・エジントンとポール・サンピというお二人の方に来ていただいて，話を聞いたことがあります。お二人はマロー・モーガンの『ミュータントメッセージ』がいかに先住民の生活を歪めて書いているかという抗議の旅行，訴

えの旅をされていたわけですが，その時は私はあまりよく理解できなかった。『ミュータントメッセージ』は読物として結構おもしろくて，白人の女性が先住民の生活にひかれて，その中に入ってゆく，つまり先住民になりたい白人が描かれている。結構いいじゃないかというような認識しかなかったのです。ところがそれは先住民の立場になってみると，自分たちの文化はそのようにして横領されているのだということになる。そういう問題があると思います。

それからもう一つ，「多文化主義をアジアから問う」という問題を出してみました。これは前回のシンポジウムの1ヵ月前ぐらいの「立命館土曜講座」で，このシンポジウムのコーディネータを務める人たちの西さん，池内さん，中村さんと私も加わって，このシンポジウムのテーマを中心にして4回にわたって話をしたのですが，その時に私は「多言語・多文化主義をアジアから問う」というテーマを出しました。ここで言いたかったのは，これまでの多言語・多文化主義の議論の中で，アジアがなぜ落ちているのか。アジアが一種のタブーのようにして触れられていない。それは何かということを言いたかったわけです。アジアは大部分の国が，ご承知のように，繰り返し，征服され植民地化されているわけですが，大雑把にいってしまえば，アジアから多言語・多文化主義を問うということは，先住民あるいは原住民の立場から，それを問うことになる。

これも連続講座でやってきたわけですが，ずっと見ていくと，ヨーロッパと比べればもちろんですが，カナダやオーストラリアに比べてもはるかに豊かな多様性を持った社会がそこにある。それであるのに，なぜアジアは無視されているのか。これはちょっと勘繰りになるかもしれませんが，脱植民地化ということが，アジア化というか，有色化につながっているということだろうと思います。オーストラリアのように明確に「アジア化」ということを出している所もありますけれども，例えば，人口の構成比はアメリカの場合でも何十年か後には，有色系の人が過半数を越える。その他の多文化主義を唱える国では全部そういうことがあります。ヨーロッパでも新黄禍説というか，有色化の恐怖が極右の支持に結びついています。

5．アジアにおけるクレオール性とディアスポラ的アイデンティティ

ここではクレオールが問題になりますが，アジアのクレオール性というのを考える必要があるのではないかと思います。私はインドネシア型とフィリピン型の二つを考えています。つまりインドネシアは200とか300の民族，言語がある。それを統合して一つの国民文化を作り上げていくという形ですね。そこではすでに古い豊かな文化があって，その多様性を国民国家が，あるいは独裁権力が統合していくという形をとっている。多文化主義ということでいえば，まさに多文化主義であるわけです。

もう一つは，フィリピンのモデルで，これも7000の島がある。それからやはり百とか百何十とかいうような言語とか民族がいる。フィリピンの場合は，最初はイスラム系の支配ということがありますけれども，スペインが来て，アメリカが来て，日本が来て，又アメリカが来て，「4回の解放」と言われるそうですが，強力な王朝文化というものが成立する以前に，植民地化されて繰り返し荒らされた結果として，インドネシアのように過去の王朝文化から民族の誇りとなるようなものが取り出せない。そこでフィリピン・アイデンティティというのは，過去ではなく未来に結ばれるフィリピンのイメージということになる。フィリピンの小学校の教科書ではフィリピン人とは何かというと，どこどこから来た何々の血が何%というように列挙してあって，そういうものの混血が国民である，というような書き方がされているようです。あるいは国語も同じようにして，インドネシアはマレー語を中心にして，一つの国語を人為的に作り上げるわけですが，フィリピンの国語は混成的でこれから形成されるもの，これから豊かにされていくもの，というような形で考えられている。

姜尚中さんには，今日はそういうお話をしていただけるのではないかと思いますが，さっき少し触れた『世界』の文章の中で，ディアスポラ的アイデンティティについて述べられています。「コリアン・

ディアスポラ」というのはたいへん大胆な提言だと思います。コリアンだけが孤立して，一つの民族，一つの文化を主張するのではなくて，さまざまな人達，さまざまな階層の間で，移動し交流する形で作られていくアイデンティティを想定されていると思いますが，出稼ぎの多いフィリピンとか，その他の東南アジアの場合を考えると，そういう状況が非常に明確に示されている。そしてそういう中で，半ばアジアであり，半ば欧米である日本が置かれている立場をどう考えなければいけないかということが問題になるのではないかと思います。

時代転換の徴候として，多文化主義を見ていくということは，崩れつつある世界システムの中で差別と搾取の網の目の全体的な構造と，細部の変化を精密に見ていくことだと思います。また，そこで繰り広げられているさまざまな形の生活に対する精密な観察はそういうものを見る繊細な感受性を必要としているはずです。多文化主義の問題，多言語主義，あるいはアイデンティティの問題を私としてはそういうコンテキストの中で考えています。

最後にもう一度，鄭暎恵さんの文章に戻りたいと思います。これは鄭さんの一番最後のところの文章なのですが，読んでいきますと，これはまさにこのシンポジウムの再論に向けて書かれているような印象を受けました。

≪非常に複雑な動きの中で，私たちはどこを目指していくのか。何を望んでいるのか。最後にその問いに戻ってみたいと思います。日本においてつまり国家を越えるマルチカルチュラリズムを構築するとしたら，最終目的は，マジョリティ，つまり「日本人であること」を得ることと引換えに，国家，社会から自己放棄を促されてきた人々が，自己の多様性，複合性を取り戻し，受け入れることでしょう。これは私なりの推測です。マイノリティとして周辺に立たされた人々は，もう遠の昔にその途についていると思います。マジョリティを自認する人々は，自分たちに既得権を与えながらも，自己譲渡を迫るシステムとしての近代国家を，本当に放棄する気があるのかどうか。そしてその後に，何をどう構築するつもりなのか。是非聞きたいと思います。マイノリティに意見を求めるだけなら，それは単なるアリバイに過ぎない。マジョリティ自身が，自分を解放するために何をどうしたいのかを語り，実践するするところにしか，その連帯，対話，語りの応答可能性，つまりresponsibility責任はないのではないかと思います。≫

そういう文章で鄭暎恵さんのコメントは終わっています。大変厳しい言葉ですが，それぞれの多様な応え方があると思います。シンポジウムの議論が開かれたものとなるように，仲間の間の均質な議論に終わらずに，多様で異質なものの対立葛藤を含む論争的な対話となるように，つまりシンポジウム自体が一種多文化主義的なものとなることを願って，あえて鄭暎恵さんのペーパーを引用させてもらいました。今，引用した言葉は同時にこのシンポジウムのタイトルに「周辺からの遠近法」，つまり「周辺からの視座」を求める言葉が含まれていることの意味を改めて思い出させてくれると思います。これで終わらせていただきます。(拍手)